

#### (現状の説明)

神学部学生の中には、教会での働き、病院でのボランティア活動、ホームレスの人達への食事ボランティアや夜回りなどのボランティアに積極的に参加している者がいる。これらの活動は、キリスト教が社会と関わる中で生まれてきたもので、キリスト教を背景とする神学部や神学部学生ならではのものであると考えられる。

ことに、教会における活動は、将来、キリスト教の伝道者となることを志望する学生にとっては必須のものであり、これまでも、教会への定期的な出席と積極的な活動を指導してきた。

#### (点検・評価の結果)

これまでは、上記のような教会での活動、社会でのボランティア活動を、いわば当然のものとして行うよう指導し、学生もそのように考えてきたが、インターンシップやボランティアの単位化という、大学を取り巻く環境の変化にあわせて、これらを単位として認定するための検討が求められている。

#### (改善の具体的方策)

次のカリキュラム改編時に、教会・社会での活動を単位として認定し、カリキュラムに位置付けるため、その要件などを検討する。

### 1.1.4.2 教育・研究指導のあり方

#### <2003年度に設定した目標>

今後とも、カリキュラム研究委員会を中心に、時代の変化や学生の要請を考慮に入れて、履修指導や研究指導に関して検討を続けていく。将来に向けての目標は以下のようである。

#### 1. 履修指導体制を強化する

カリキュラム編成によって、自由履修枠など学生の関心に基づいた履修が可能となっている部分が多くあるので、系統的計画的に履修できるよう、助言の体制を整える。

#### 2. 分野別研究演習によって研究への関心を深める

3年次より履修が可能になる分野別研究演習によって、専任教員の研究に触れるとともに、それによってより深い研究への関心を高めるように指導する。

#### 【評価項目 6-2-1】カリキュラムにおける高・大接続

(必須要素) 学生が後期中等教育から高等教育へ円滑に移行するために必要な導入教育の実施状況

#### (現状の説明)

高等学校教育との接続を意図して、文章を読み・書く、また研究に必要な情報を収集・

発表するという基本的能力の育成を目的にした基礎演習を1年次、2年次において開講し、必修としている。

言語教育科目においては、英語を必修とし、高等学校までに学習した内容を基に、コミュニケーション能力を養成し、将来、英語で書かれた専門書を研究に使用できるよう、授業を開講している。

また、神学という学問全体、また神学各領域への導入を意図した専門分野ごとの入門科目を設置しており、これらも必修としている。さらに、 Semester制において教育効果を最大限に発揮できるよう、これらは週2コマ4時間開講している（ペア科目）。神学の研究に欠かせない古典語学（聖書ヒブル語、聖書アラム語、新約聖書ギリシャ語、ラテン語、コプト語）に関しては、早い時点からの学習が可能となっている。

分野別研究演習は2004年度新カリキュラムにおいて設置した。2004年度入学生が3年となる2006年度からの開講となっている。

#### （点検・評価の結果）

2004年度に始まった新カリキュラムにおいては、それまでのカリキュラムの問題点が整理され、後期中等教育からスムーズに移行できるようになっている。ことに、1～2年次に必修となっている基礎演習は、少人数の演習形式によって、着実に成果を上げつつある。

神学に関する基礎科目を1年次、2年次に必修として、しかもペア科目として開講しているために、学生の負担は軽くない。Semester制の利点を生かしながら、より高い教育効果を上げる開講形態を探る必要がある。

#### （改善の具体的方策）

2007年度の完成年次を目標に、カリキュラムの改編を検討する。

#### 【評価項目 6-2-2】 履修指導

- （必須要素） 学生に対する履修指導の適切性
- （必須要素） オフィスアワーの制度化の状況
- （必須要素） 留年者に対する教育上の配慮措置の適切性
- （選択要素） 学習支援（アカデミック・ガイダンス）を恒常的に行うアドバイザー制度の導入状況
- （選択要素） 科目等履修生、聴講生等に対する教育指導上の配慮の適切性

#### （現状の説明）

神学部は少人数の学部であるので、一人一人の学生の能力・希望・将来の目的に合った教育がなされ、それなりの効果を取めている。

履修に関する指導体制としては、学年・演習ごとに担任を置き、履修指導を含む、学生生活全般にわたる助言を行っている。また、少人数であるという利点を生かし、オフィスアワーやゼミ合宿、学部全体の一泊研修会などによって、教員と学生の人格的ふれあいの機会を設け、全人的教育のために役立てている。特に、欠席の多い学生、成績が不振な学生、留年者に対して、学期ごとに面談を行い、きめ細かく指導して、学習への意欲を喚起している。また、学部本館内に、基礎的な資料を中心とした図書室と自習のためのスペースを設置し、それらの利用によって、学生の学習や研究の促進をはかっている。

また、AO方式での入学試験時に受験生全員に面接し、志願動機、勉学の希望の内容、将来の進路計画などを尋ねている。それは入学後の教育で十分な配慮がされ適切な教育効果を上げるためである。

科目等履修生・聴講生に対しては、履修に当たり、授業担当教員や教務主任がとくに個別に面接を行っている。

#### (点検・評価の結果)

教務主任・学生主任、ゼミ担当者、学年担任などの担当者によって、一人一人の学生に対して配慮を行い、学習意欲を喚起している。このことは、学生の学習に対する姿勢を問い直す機会となり、再び意欲的に勉学に取り組むことができるなどの成果を上げている。あるいは、進路を考え直す機会ともなっている。

しかし、履修指導に関しては、現在3つのカリキュラム（2002年度以前入学生、2003年度入学生、2004年度以降入学生）が同時並行して進んでいることもあり、学生の間には十分な認識があるとは言えない。学生が、自分が入学した年度のカリキュラムが持つ特長を理解し、自らの関心と進路に基づいて履修できるよう、さらにきめ細かい指導が必要となる。収容定員の増加に伴い、また、新たなコース制の導入に伴って、一層の努力が求められている。

オフィスアワーについては、年度初めに時間を決めて実施しているが、学生の間での認識が低いのが現状である。しかしながら、少人数の神学部においては、オフィスアワーの時間帯以外でも個別に対応可能なので、大きな問題ではないと考える。個別に面談が必要な学生については、学部事務室より連絡をして面談している。

留年者の学習を支援することは、神学部においても重要な課題であると認識している。研究演習Ⅱを既に履修した者についても、それぞれの研究演習において続けて指導し、学習の意欲を継続させている。

#### (改善の具体的方策)

学年担任制、教務主任・学生主任の役割を精査し、さらに効率的な指導体制を構築する。

#### 【評価項目 6-2-3】 社会人学生、外国人留学生等への教育上の配慮

(選択要素) 社会人学生、外国人留学生、帰国生徒に対する教育課程編成上、教育指導の配慮

#### (現状の説明)

教育課程編成上、外国人留学生を対象として「日本語」科目を開講し、第1外国語として必修としている。その他、特に配慮が行われていることはない。

教育指導上は、社会人学生、外国人留学生、帰国生徒に対しても、通常の履修指導や、担任制度を利用した学生生活上の指導を行っている。

#### (点検・評価の結果および改善の具体的方策)

社会人学生、外国人留学生、帰国生徒は1年次からの入学であり、他の一般学生と同等の扱いとしている現状に関して、特に問題はないと考える。